

イギリス絶対王政下にみる

港湾と海運(1)

—ロンドン港の隆盛と地方港衰退の歴史的背景—

長	島	秀	夫
小	林	照	夫

目 次

1. 緒 言
2. 主要港にみる毛織物輸出の趨勢
3. ロンドン港の興隆とアントワープ
4. 結 語

1. 緒 言

チューダーTudor王朝期は15世紀末から17世紀初め(1485年から1603年まで)にかけての一時期である。この16・17世紀は現代でも容易に処理できない歴史的事象が山積みされ、それらの事象の取り扱いにあたっては、これまで以上のアプローチの視点と深い問題提起が要求されている。いわば、研究史上の「暗黒時代」(Dark Ages)といわれる一時期である⁽¹⁾。

また、この期は世界史的には増田四郎教授が指摘しているように、「とにかくにも東西両洋の経済的つながりが形成されはじめる時期、つまりのちの世界経済的関連への素地ができる⁽²⁾」重要な時期でもある。その意味では、チューダー王朝が位置する16・17世紀という時代は、船山栄一教授がその論稿、「イギリス貿易の構造変化」(社会経済史学会編『社会経済史』, 第37巻第1号, 5ページ)で論述しているように、都市経済を単位とした一種の国際貿易とよびうるような、「中世的世界貿易⁽³⁾」の構造的枠組が徐々に解体し、国を単位とする新しい世界経済が図式化されようとする段階であった。

このような世界史の潮流のなかで、チューダー王朝もまた大きな変革を遂

げようとしていた。政治的側面においては絶対王政という国王主権の形態をとりつつも、歴史的近代を位置づけるにふさわしい国民国家が覚醒しつつある一時期であり、そうした政治的側面の変化と相まって、経済的側面では毛織物工業などのような国民的規模での産業が徐々にではあるが形成されはじめ、まさに、「資本主義的生産様式の基礎を創出した変革の序曲⁽⁴⁾」といわれる、これまでにない変化が現われはじめた。こうした状況のもとで、その国の政治的・経済的变化と深く結びついた貿易構造も、当然のことではあるが大きく変わろうとしていた。貿易構造の変化と密接に結びついた現象については、次の3点をもって整理することができる。その第一の点は、15世紀中頃を境として主要な輸出品目であった羊毛にかかわって、毛織物輸出が徐々に伸張してきたこと。第二の点は、毛織物輸出の増加に伴って、ロンドン貿易商人の活動がこれまでよりも積極的になってきたこと。第三の点は、首都ロンドンへの経済力集中と、それにもとづくロンドンの排他的・独占的地位の確立などである。

こうした貿易構造の質的变化——一次生産物たる羊毛から製造品たる毛織物への推移とその量的拡大が、都市経済に支えられた「中世的世界貿易」の担い手として、従来の指定市場 Staple を中心に活動が続けていたマーチャント・スティブラーズ Merchant Staplers に対抗して、新たに台頭してきた特権的な毛織物輸出商組合たるマーチャント・アドヴェンチュラーズ Merchant Adventurers (以下、アドヴェンチュラーズとする)の勢力を顕在化させた。つまり、これは多くの外国商人を含む構成体であったマーチャント・スティブラーズによる貿易の主導的地位にあった羊毛輸出が、花形輸出品としての地位を喪失し、イギリス⁽⁵⁾貿易商人、とくにロンドン商人の構成体たるアドヴェンチュラーズの毛織物輸出にその地位を譲らざるをえなくなった過程である。

アドヴェンチュラーズの活躍の場は、イギリス産毛織物の主要海外市場として15世紀後半から脚光を浴びてきたアントワープ Antwerp であった。

アントワープにあらたに開拓された海外市場を通して、イギリスの貿易は大きく変わろうとしていた。このような歴史的背景のもとで、イギリスの主要港が担う役割について若干の素描を試みつつ、ロンドン港の隆盛と地方港衰退の原因について言及したい。

しかし、この小稿ではとりあえず16世紀中頃までの状況に限定し、後のエリザベス一世の治下までの一時期のそれについては、次の機会に位置づけたい。

- 注 (1) F. J. Fisher, "The Sixteenth and Seventeenth Centuries: The Dark Ages in English History? Economica, vol. 24, No. 93, 1957.
 (2) 増田四郎「社会経済史における16・17世紀ー共通論題報告のじめにー」(社会経済史学会編『社会経済史学』第37巻第1号) 1ページ。
 (3) 船山栄一教授の用語法に従う。何故なら、教授がいうように、国民経済成立以前の段階で、国民経済の有機的関連のもとではじめて用いられる「国際貿易」の概念によっては、当時の交易関係を十分に説明できないように思われるからである。
 (4) 向坂逸郎訳、マルクス『資本論』(岩波書店第一版刊行百年記念号)、1967年、899ページ。
 (5) 小稿でいうイギリスはとくに断わりのない限りイングランドを指す。

2. 主要港にみる毛織物輸出の趨勢

アドヴェンチュラーズのアントワープへの進出は、1407年、ヘンリー四世の治世、ホーランド Holland, ジーランド Zeeland, ブラバント Brabant とフランダース Flanders におけるイギリス商人に与えられた組合結成の権限と、ブラバント Duke of Brabant 公からかれらにアントワープ居留の特許が与えられたことに始まる。その後、イギリスはアントワープ市場を開拓し、ヘンリー七世の治世、1496年にヘンリー七世とマクスミリアン大公 Archduke Maximilian との間でかわされた近代的な通商条約の先駆として有名な「大協定」(Maganus Intercursus) によって、この地でのイギリス商人の特権的地位が約束された。この地におけるイギリス商人の特権的地位の確立は、当時のイギリス王国にとってこのうえもない喜びであったに違いない。そのことはあのしみったれたヘンリー七世がそれを記念してアントワープの

大聖堂ヘステンドグラスを贈ったことからうかがい知ることができる⁽¹⁾。

アドヴェンチュラーズはこのようにアントワープ市場を獲得し、チューダー王朝の政策的意図のもとで次第にその組織を拡大しつつ、輸出品目の移り変わり一毛から毛織物へと強く結びつきつつ、その地位を揺ぎないものにしていった。このような歴史的背景のもとで、アドヴェンチュラーズは保護、育成され、その保護、育成と相まって王国の富の源泉たる毛織物の輸出は年々増加の一途を辿っていった。とくに、その後のヘンリー八世の時代には、毛織物輸出はかれの巧みな自由主義的な国家政策にあづかって、さらにいっそう伸張した。

15世紀から16世紀中頃にいたるまでの約一世紀半にわたる当時の主要港からの毛織物輸出量をケァラス・ウイルソン E. M. Carus—wilson 教授らの周到詳密な統計資料から次のように素描することができる。

イングランド主要港からの毛織物輸出量 (単位: クロス)

年次	1400 ~ 1410	1410 ~ 1420	1420 ~ 1430	1430 ~ 1440	1440 ~ 1450	1450 ~ 1460	1460 ~ 1470	1470 ~ 1480	1480 ~ 1490	1490 ~ 1500	1500 ~ 1510	1510 ~ 1520	1520 ~ 1530	1530 ~ 1540
ポ ス ト ン (Boston)	24,849	22,670	20,320	10,278	11,139	3,550	5,187	3,983	1,863	672	537	253	32	362
ブ リ ス ト ル (Bristol)	34,156	22,778	44,273	40,870	51,060	33,551	20,193	20,309	47,275	65,153	39,156	30,824	23,084	25,798
エ ク セ ター (Exeter)	3,050	4,713	3,964	11,176	17,282	12,590	9,464	12,835	30,211	38,928	82,677	47,591	41,562	50,264
ハ ル (Hull)	24,828	23,822	30,616	29,147	30,772	19,928	10,629	17,174	14,910	18,646	24,686	13,486	9,541	6,530
ロ ン ド ン (London)	131,371	135,952	168,556	175,967	190,816	159,744	187,090	288,862	359,091	315,958	495,006	626,704	628,788	836,166
サウザンプトン (Southampton)	57,590	22,842	61,544	84,136	99,565	70,513	52,333	39,724	13,453	26,769	97,365	121,253	77,384	56,490
リ ン (Lynn)	—	16,245	16,124	14,203	17,588	6,397	4,175	2,816	3,107	2,651	7,500	1,754	2,100	1,007
合 計	275,844	249,022	345,397	365,777	418,222	306,273	289,071	385,703	469,910	468,777	746,927	841,865	782,591	976,617

(出所) E. M. Carus-wilson & Olive Colleman, England's Export Trade 1275~1547, (Oxford. 1963) pp. 87~119より算出
 原表の期間は Michaelmas to Michaelmas となっている。

表から判断できるように、ロンドン港の毛織物輸出の占める割合は途方もなく大きなものであった。こうしたロンドン港の隆盛とは対象的に、プリストルBristol, サウザンプトンSouthampton, ハルHull, エクセター Exeterなどの地方港 outports は日々衰微の色合いを濃くしていった。

1400年から1410年までの毛織物輸出量と1530年から1540年までの140年間もの長きにわたる各港の輸出量の趨勢を求めるために、1400年から1410年を100として比較すると、ボストンBostonは約1.4, プリストルは約75.5, エクセターは約1,648, ハルは約26.3, サウザンプトンは約98.1, リンについては1400年から1410年にかけての数字が求められないため、1410年から1420年までの10年間を100として求めると、1520年から1540年には約6.2というように、エクセターの約1,648を除き、いずれの港も毛織物の輸出量が減少したのに比べ、ロンドンは約636.5と6.4倍近い伸び率を示している。エクセターは約16.5倍近い数字を示しているが、このような大きな伸び率の割合にはその港から積み出される毛織物の量は少なく、1400年から1410年までの輸出量をロンドン港からのそれと比較すると2.32たらずにすぎず、1530年から1540年の50.264クロスは、その当時のロンドン港の836.16クロスに比べ、6%にすぎない。それゆえ、エクセターからの毛織物輸出量は、全体からみて決して大きな割合を占めてはいなかった。

ロンドン港からの毛織物輸出は、15世紀の中頃からとくに活況を呈し、1450年から1460年には既述の七港の毛織物総輸出量 306,273クロスの約52.1%と、1460年から1470年には総輸出量 289,071クロスの約64.7%, 1470年から1480年の間は約74.8%, 1480年から1490年には約76.4%, 先に述べた「大協定」締結を含む1490年から1500年には約67.4%, 1500年から1510年にかけての約66.3%というように一時的な停滞の時期はあったが、その後また順調に伸び、1510年から1520年には総輸出量が841,865クロスと伸張し、ロンドン港からの積み出し比率も約74.4%になり、ほぼ4分の3をはき出すのだった。さらにこうしたロンドン港からの輸出量は1520年から1530年にかけて

も増え、その間には約80.3%を占め、1530年から1540年にかけては約85.6%になり、毛織物総輸出量の大部分を首都ロンドンの港湾から積み出すにいった。

ロンドン港からの毛織物輸出の集中は、とりもおさず地方港の衰微と密接に結びついていたし、イギリスにおいて羊毛輸出が減退し、毛織物輸出が伸張のきざしをみせはじめた頃とほぼ時を同じく(15世紀後半)していた⁽²⁾。このように毛織物輸出によつてロンドン港は隆盛をみたが、それと対象的に地方港は衰退した。そのような地方港衰退の原因については、おおよそ次のように推察することができる。

西海岸に位置しているブリストルは14世紀にはガスコーニュ Gascogne 貿易の基地として、全国の毛織物輸出の半分以上も積み出した中心的な港であった。しかし、1453年に終結をみた 100年戦争の余波をうけ、ガスコーニュ地方自体が経済的に疲弊した。そのため、この地方への貿易はふるわなくなり、ガスコーニュ地方の経済に支えられていたブリストルも次第にの不振を失い、その港からの輸出量は大きく減少した。

北海に面したハル、ボストン、リンに代表される東海岸の諸港は、中世以来の北海・バルト海貿易の中心的な羊毛輸出港として賑わっていた。しかし、ハンザHanseとの抗争に敗れたのち、北海・バルト海貿易から締め出され、その後背地の市場を失ったことが原因となって、貿易港の機能をこれまでのように果たさなくなった。

南海岸のサウザンプトンもブリストルと同様に、ガスコーニュ貿易の杜絶に影響され、昔日のような活況がみられなくなった。しかし、サウザンプトンの場合は、ブリストルほど速いペースで衰退することはなかった。その港はロンドンとの陸上交通の便の良さや、イタリア人がこの港を頻繁に利用していたことが助けになり、しばらくの間は貿易港としてかなり機能していた。しかし、16世紀に入り、イタリアの諸都市国家にのちのちの繁栄の面影がみられなくなるにつれ、この港の衰微は厳しく、目を覆うものがあっ

た。1532年5月22日、フランドース航海の途中に寄港していたベニスの年次船隊がその港から姿を消した。その日を最後にして、この港でベニスの年次船隊を再びみることができなかった⁽³⁾。この年次船隊の帰港はサウザンプトンに大きな打撃を与えたといわれている。

注 (1) G. D. Ramsay, *English Overseas Trade during centuries of Emergence*, 1957, p. 14

(2) E. M. Carus-wilson, *Medieval Merchant Ventures*. 1967, Introduction に記載されている図表 (The Rise of the Merchant Adventurers— England of Row Wool and Wollen cloth. 1347—1544) から趨勢を読みとることができる。

(3) C. E. Fayle, *A. Short History of the World's shipping Industry*, 1933 & 1934, 佐々木誠治訳『世界海運業小史』1957年, 154ページ。

3. ロンドン港の興隆とアントワープ

毛織物輸出の伸張に伴う海外市場の動向を考えたとき、その海外販路をフランス、イタリア、スペイン、ポルトガルの南ヨーロッパ市場と、プロシヤやポーランドからスカンジナビア半島を含む北海・バルト海市場と、アントワープを中心とする低地地方 Low Countries の三つに大別することができる。ところが15世紀後半になると、イギリスは南部ヨーロッパと北海・バルト海の二つの海外市場を手放さなければならなくなった。これは一般に言われているように、百年戦争の余波をうけたガスコーニュ地方の経済的な疲弊と、ハンザとの抗争の敗北との二つの事由によって説明される。このような理由から、イギリス商人に残された唯一の海外販路はアントワープを中心とする対低地地方貿易だけとなった。このアントワープはイギリス商人が自からの手で選んだハンザとあまり縁のない海外市場であった。この間の事情を船山教授は次のように説明している。「15世紀後半以降における海外市場の諸事情によって、イギリスの毛織物輸出はいわば強制的にもっぱらアントワープに集中することを余儀なくされたともいえよう。そしてこの間の事情を象徴的に示すものが、ロンドンのマーチャント・アドヴェンチュラーズのイギリス毛織物輸出における独占的地位の確立過程であろう⁽⁴⁾。」と。

こうしていまやドーバーDoverの対岸によりやく世界的な市場として成長してきたアントワープへ、アドヴェンチュラーズの手によって毛織物は積み出されていった。その新しい市場の開拓の担い手がロンドンのアドヴェンチュラーズであったことから、毛織物はロンドン港から集中的に出荷されていた。同時にこのことが首都ロンドンへの経済力集中につながり、新市場としてアントワープが発展していくにつれ、毛織物輸出に従事していた多くの貿易商人たちがロンドンのアドヴェンチュラーズに加入したため、それは全国的な大独占組織へと育っていった。

低地地方の市場の中心地として位置づけられるアントワープは、それまでブリージュ Brugge やロンドンには比べものにならないほど小さな町であり、その内壁でのイギリス産毛織物の市場の確立が主たる原因になって、それはヨーロッパ商業の中枢へと変貌を遂げていった⁽²⁾。アントワープがヨーロッパの商業の中核的機能を果していくにつれ、次第に金融市場としても注目されはじめた。そのことはジェノア Genoaやリヨン Lyon にも西ヨーロッパおよび中央ヨーロッパ全体にわたって、取引を比較的容易にする国際的な金融機構があったものの、その中枢はアントワープであった⁽³⁾、ということからうかがい知ることができる。

そうしたヨーロッパの商業市場と金融市場の中枢であるアントワープへ向けられた、ロンドンからの主たる輸出品は毛織物であった。それゆえ、ロンドンへの経済力集中はかの地への毛織物輸出と不可分の関係にあった。このことは多くの史家が論ずるところである。しかし、アドヴェンチュラーズの手によってロンドンから出荷される毛織物は、染色と剪毛の最終工程を取り除いた未仕上げ、未完成の織物であった。未仕上げの毛織物はアントワープの背後地で染色、剪毛されて完成品となった。その意味では、イギリス産毛織物の輸出は量的拡大こそみたが、あくまでもそれはアントワープの染色と剪毛の優秀さと、その製品の販路がアントワープによって確保されていたことによる拡大であって、イギリス産毛織物の優秀性とその市場掌握によって

約束されたものではなかった。つまり、それはアントワープの従属的關係において確保されたものである。

従属的關係にあったにも拘わらず、イギリスは未仕上げ毛織物の輸出に力を注がざるをえなかった。そのことからガスコーニュ地方の経済的な疲弊とハンザとの抗争の販北が、イギリスにとっていかに大きなものであったかを推察することができる。

しかし理由はともあれ、アドヴェンチュラーズの海外貿易の働きかけにより、ロンドンを経済力を強め、その経済力の強化がこれまでみることもなかったロンドン港の繁栄をもたらした。

注 (1) 船山栄一 前掲稿, 16ページ。

(2) G. D. Ramsay, op. cit., p.15.

(3) G. N. Clark, *The Wealth of England, 1496-1760*, 1946. 大淵彰三 監訳『イギリスの富—イギリス経済史1496—1790—』1970年, 48ページ。

4. 結 語

ロンドンの毛織物輸出力は大幅に増加した。このように大きな伸張をみた毛織物は当時つぎのようにとらえられている。その頃の産業を担う手工業者を15世紀中頃の人々は「国外へ貨幣をもちだすことだけしかない業者、もうけた貨幣を国内でつかう業者、さらには、国内に財宝をもたらす手工業者⁽¹⁾」の三つに分類している。そして、第一のもののなかには、絹物商、雑貨商、ぶどう酒商、小間物商、装身具商を組み入れ、第二の種類の手工業者には、靴屋、仕立屋、大工、石工、瓦屋、肉屋、醸造業者、パン屋、あらゆる食料品などの業者を、第三のそれを、織物業者、なめし革業者、帽子製造業者、毛織物業者として分類し、第三の業者だけがその技術と能力によって、財宝を国内にもたらすと、高く評価している⁽²⁾。この第三の業者を基軸に、多くの業者が町や都市に集まり、国をあげて製造品の輸出に励げみ、一国の富を蓄積しようとする機運がみられた。このような機運はなにもこの頃にはじめて現われたものではなかった。

そのことを物語る全産業構造を再編制するなかでの都市への集中化傾向は15世紀の末頃からみられ、それはロンドンに最も顕著に現われた。15世紀の末頃から16世紀のはじめには、ロンドンは40,000から50,000の住民をもつ比類のない都市であったといわれている⁽³⁾。そして、その都市の人口は年々増加し、1539年には60,000から80,000の間を数え、1555年には90,000人ほどにも増え、1605年には224,775人を数えたと推察される⁽⁴⁾。このようなロンドンへの人口の集中は、ロンドンの経済的繁栄と不可分な関係にあった。アドヴェンチュラーズの活躍により、ロンドンがますます経済の中心地として発展していくにつれ、他の地域の富裕な商人や織元までがロンドンへ吸引されてきた。かれらのロンドンへの移入を数字として正確におさえることはできないが、ロンドンの人口増加の一端を裏付けたことは確かである。

このようなひとつの歴史的背景のもとで、ロンドン港の隆盛と地方港の衰退の原因のひとつを説明することができるが、それはなにもこれまでに述べてきたような海外販路の移り変りに伴う港湾の立地性にのみ規定されるものではなかった。それは必要条件であって十分条件ではない。

当時のイギリスの港を振り返ってみると、ロンドン港だけが秀れた立地条件をそなえていたわけではない。四面が海に囲まれ、長く不規則な海岸線を有していたイギリスでは、いたる所に良港を築くことができた。ましてや当時のような小型船舶時代には、高見玄一郎氏も指摘しているように、港湾は一般にきわめて単純な、幾つかの条件を充足すればそれでよかった⁽⁵⁾、からである。

しかしそれにも拘わらず、ロンドン港の隆盛と地方港の衰退といった、地域的发展の格差が現われるにいたったことは、港の背後にある都市の盛衰と密接に関係していた。換言すれば、港湾の盛衰はその立地条件にのみ規定されるものではなく、むしろ港湾の背後地の政治的・経済的力関係に多分に依存するものである。

詳細については次の機会に委ねたいが、こののちはあのように繁栄してい

たアントワープまでが、1585年を境にして、アムステルダムに国際商業と経済的繁栄が移るに従い、海上通商路の図式が大きく塗り変えられていったことから理解できよう。

こう考えると、港湾の盛衰は政治、経済と切り離された形で独立的に存在するものではなく、むしろ常にその国の政治、経済的な要因と深く密接に結びついている。

大都市への経済力の集中、集積、それと結びつく港湾の隆盛、その反面での地方都市、地方港の衰退、この関係は決して昔日のものとしてかたづけられない。

注 (1) E. Lamond (ed.) *A Discourse of the Common of this Realm of England*. 出口勇蔵監修『近世ヒューマニズムの経済思想』1957年、98ページ。

(2) 出口勇蔵監修、前掲訳書。98 | 100ページ。

G. N. Clark. (3) 大淵彰三監訳、前掲訳書、17ページ。

(4) C. H. Williams (ed.), *English Historical Documents*, Vol. 4, 1967, p. 8.

(5) 高見玄一郎『近代港湾の成立と発展』1962年、34ページ。